



ピノコパパのエッセイ集か  
ら



乱歩氏

pinokopapa

## 乱歩氏 -1-

名探偵といえば、いまはコナンらしいのですがコナンのことは孫に任せておいて、私たちにとっての名探偵といえば明智小五郎ということは誰しも認めるころと思います。いやいや、金田一耕助が一番という人もいるでしょうが、探偵小説というジャンルを日本に確立させたのは江戸川乱歩氏でありました。そしてこの人が作った名探偵のキャラクターが明智小五郎でありました。そして、私たちが子供のころ夢中になって読んだのが、この明智小五郎と怪人二十面相でありました。この物語の作者江戸川乱歩氏が生まれたのが明治27年、亡くなったのは昭和40年でありますから、ちょっとびっくりです。享年70歳でありました。発表した作品数は927と言われておりますから、これもびっくりです。

乱歩氏邸は、たまたま立教大学の北端にあったので大学に寄贈され、一般に公開されています。その邸宅の一角に、幻影城と乱歩氏に名付けられた土蔵があり、ここには4万点に及ぶ資料と蔵書が置かれています。その多くが英語とドイツ語の原書で、乱歩はこれらを原語で読んでおりました。そのころ日本文学は黎明期でありましたから、推理小説などは存在せず、そのような蓄積のうえで乱歩氏は日本の探偵小説の創始者となり得ました。探偵小説は、言わば推理小説でありますから、このジャンルに人形佐七、銭形平次まで含めてしまう乱暴な所説もありますが、やはり創始者である乱歩氏の作品を基準とすべきと思います。その乱歩氏の作り出したヒーローが名探偵明智小五郎です。明智小五郎の鋭い観察力と豊富な犯罪への知識、そして超人的な体力は、やはり世界的な探偵、シャーロックホームズと共通しているように思います。ですからその点、金田一耕助とはキャラクターが違ってきます。なにより、犯罪が起こった後、いつも後手後手に立ち回り、犯罪を未然に防げない不甲斐なさは、明智にはありません。つねに二十面相と対峙し、その優れた頭脳で戦います。髪をかきむしって走り回り、犯罪が完結成就してのちに犯人をあばくのはどうも後味の悪い感じがあります。まあ、猟奇殺人事件そのものを描くのが、横溝正史氏の小説作法なのだと思いますが。

乱歩氏の推理小説は、二銭銅貨で始まります。これは乱歩氏が傾倒したポーの『黄金虫』を彷彿とさせる暗号物で、私がエドガー・アラン・ポーを知るようになったのも乱歩氏からでした。あの黒猫の不気味さは、また違った雰囲気のものだと思いました。

乱歩氏は七十歳で没しておられます。乱歩氏のデビュー作の二銭銅貨は大正十二年に発表されました。これはポーの黄金虫にも通じる暗号物だとされています。これをかいた当時、乱歩氏は失業していて、東京の家を引き払って妻と赤子とともに大阪の父親の家に転がり込んでいたという、言わば貧窮の状態でした。そんな時ふいに思い付き、昔のめりこんでいた探偵小説を書き始めようとしたのがこの二銭銅貨と一枚の切符です。曰く、失業中のことだから時間は充分にある。もし、その原稿が売れば、煙草代にも不自由している際、こんな有難いことはない。多年、培ってきた探偵小説への情熱を吐き出すのは今だ、と思ったのでしょう。

二銭銅貨の暗号のことはおいておきます。しかし、この暗号についても乱歩氏は大学在学中に暗号史を調べて精通していたそうです。

## 乱歩氏一2一

この乱歩氏を見てもわかるのですが、日本人ってどこかオタクなところがあるような気がします。しかし、そのオタクなところが芸になり、その芸が身を助けます。乱歩氏は自分を異邦人と感じ続けていたそうです。エッセイ集にそう書いておられますから、異邦人は小説を書いて作家にでもなるしかなかったと書いておられます。その、他人とは違う自分を意識したのち、乱歩氏は外国の推理小説とかにのめりこんでゆきます。そして、学生時代にこの暗号について興味を持ち、暗号史を詳しく調べたりもしています。そんなところをみると、乱歩氏は結局、本人が言う通り、作家にでもならなければ納まらなかったのだと思います。

さて、二銭銅貨の暗号ですが、実を言うと、何やら数学の問題を読まされたような気分になって、あまり覚えていないのです。乱歩氏は後になって、最初点字と南無阿弥陀仏の組み合わせで暗号を考え、それに二銭銅貨という隠し場所や、偽札の件なんかを付加えた暗号が全体の中心になっていて、その外に大して創意はない訳ですと述懐しております。そうであれば、私のこの作品の読み方は大間違いということになります。そこで、青空文庫を頼りに読み返してみました。しかし、やっぱり暗号を解く部分は数学の回答を眺めているみたいで、ちゃあんと頭に入ってきてません。よって、ちょっと見送させていただくことといたしました。

### 乱歩氏一3一

乱歩氏の代表作はもちろん怪人二十面相と少年探偵団のシリーズであるだろうと思いますが、二銭銅貨に続いて書かれた作品はそんなもんじゃありませんでした。もちろん D坂の殺人事件とか心理試験、屋根裏の散歩者などの本格的なミステリー小説もあるわけですが、人間椅子にはじまる一連の作品は戦前のエログロナンセンスといわれた、爛熟した時代背景に乗ったものになっております。人間椅子、踊る一寸法師、モノグラム、お勢登場、人でなしの恋、パノラマ島奇談、鏡地獄、陰獣、芋虫、孤島の鬼、押絵と旅する男、蟲、盲獣と挙げればきりがないほどです。中にはそれにそぐわないと思われるものもありますが、これらが1925～6年ごろから書かれていたことに改めて驚かされます。1926年といってもピンと来ないかもしれません。大正十五年、つまり昭和元年です。翌年、一九二七年、昭和二年に芥川龍之介が没しております。龍之介、三五歳でした。彼の言うぼんやりとした不安が満ちた時代でもありました。乱歩氏の創作活動はそんな時代から活発に始まったのでした。この文章は、こののち、独断で私の気になった物をすこし取り上げてゆきたいと思います。

### 乱歩氏一4一

人間椅子に始まる数々の怪しい作品は、まさに猟奇的で変態の指向性に満ち満ちておりました。その猟奇的一群と本格的な探偵小説が共に同じ小説となっているのが、D坂の殺人事件でありました。この小説には重要な点があります。それは明智小五郎というキャラクターが登場するからです。本編では、明智は和服を着た、ぼさぼさの髪の毛、まるで何をしているかわからない人物として登場してきます。未発表だった下書きでは、明智はまさしくシャーロックホームズまがいか、まるっきりその焼き直しのような形でえがかれています。明智は、本の谷間に埋もれて大いびきで寝ているような男で、警察の手に負えない難事件の解決を、一介の探偵に頼みに来るという書き方で始まっています。頼まれれば、彼はマドロスパイプをくわえて事件の捜査に乗り出すという設定ですから、まさにホームズそのものです。草稿ではこうなっていた明智も、決定稿では、いつもの荒い棒綿浴衣を着て、変に肩を振る歩き方で歩く、単なる探偵小説好きとなっております。そして、その最初の登場の仕方にも伏線は張られ、乱歩氏がこの小説を発想した縦縞のトリックが巧みに埋め込まれています。この小説をご一読になった方々は、その巧みさにも

うお気づきだと思いますが、乱歩氏は大阪に住んだとき、京阪電車の線路わきの、杭の並んでいるのを見て、これは何かに使えないかと思っていたそうです。このトリックについては後で紹介しましょう。

大学を卒業して就職浪人をしている「私」は、暇つぶしにカフェまわりをしていて、一番安いコーヒーをお代わりして過ごしております。

乱歩氏—5—

要するに、明智という男は、探偵小説好きのオタクなわけで、話をして見ると如何にも変り者、それで頭がよさそうで、私の惚れ込んだことには、探偵小説好なのだが、と書き始められています。そして、その文章の続きに、被害者の女性のことがさもさりげなく

記されてこの探偵小説は始まります。

その男の幼馴染の女が今ではこの古本屋の女房になっているという事を、この前、彼から聞いていたからだ。

さらに、この古本屋の細君というのが仲仲の美人で、どこがどういうではないが、何となく官能的に男を引きつける様な所があるのだ。

と、これさえも計算された伏線が張られます。さて、このD坂の殺人事件は一種の密室殺人事件であることにお気づきでしょうか。この何となく官能的に男を引きつける様な所がある古本屋の女房が殺害される時、店先の方は「私」と明智が見ています。そこへ本を万引きする男が現れるのですが、それでも誰も出てきません。そのことに不審を抱いた二人が出向き、奥の間に細君の死体を見つけて事件は起こります。ここでも作者はある仕掛けをします。

二人はドカドカ奥の間へ上り込んで行った。明智の手で電燈のスイッチがひねられた。そのとたん、私達は同時に「アッ」と声を立てた。明るくなった部屋の片隅には、女の死骸が横わっているのだ。

電燈は明智の手でひねられるのです。そして警察を呼びに行く間にこの安普請の長屋の間取りが披露されます。

そんな鍵もかからぬ、夏のことゆえ六畳の間の戸は開け放たれ、板塀しか外と隔てるもののない家屋で、どこが密室かということになるのですが、作者は「足跡はまるで駄目です」刑事が報告した。「この裏口の辺は、日当たりが悪いせいかひどいぬかるみで、下駄の跡が滅多無性についているんだから、とても分りっこありません。

と捜査状況をかきとめ、さらに、人の目をもって密室を完成させます。それがアイスクリーム屋の証言です。

「今晚八時前後に、この路地出入りしたものはないかね」

「一人もありませんので、日が暮れてからこっち、猫の子一匹通りませんので」

店の前は明智達、裏はアイスクリーム屋の証言で密室は完成したということです。それはさらに、古本屋の一軒置いて隣の菓子屋の主人が、日暮れ時分からつい今し方まで屋上の物干へ出て尺八を吹いていたことが分ったが、彼は始めから終いまで、丁度古本屋の二階の窓の出来事を見逃す筈のない様な位置に坐っていたのだ。

という証言で、二階から逃げ出す者もいなかったということが確定的となります。

乱歩氏一六一

犯人について首をかしげながら協議しているさなか、奇妙な証言が飛び込んできます。証言するのは二人の学生です。

「僕は丁度八時頃に、この古本屋の前に立って、そこの台にある雑誌を開いて見ていたのです。すると、奥の方で何だか物音がしたものですから、ふと目を上げてこの障子の方を見ますと、障子は閉まっていたけれど、この格子の様になった所が開いてましたので、そのすき間に一人の男の立っているのが見えました。しかし、私が目を上げるのと、その男が、この格子を閉めるのと殆ど同時でしたから、詳しいことは無論分かりませんが、でも、帯で男だったことは確かです」

「で、男だったという外に何か気附いた点はありませんか、背恰好とか、着物の柄とか」

「見えたのは腰から下ですから、背恰好は一寸分かりませんが、着物は黒いものでした。ひょっとしたら、細い縞かであったかも知れませんが。私の目には黒無地に見えました」

「僕もこの友達と一緒に本を見ていたんです」ともう一方の学生、「そして、同じ様に物音に気づいて同じ様に格子の閉るのを見ました。ですが、その男は確かに白い着物を着ていました。縞も模様もない、真白な着物です」

「それは変ではありませんか。君達の内どちらかが間違いでなけりゃ」

「決して間違いではありません」

「僕も嘘は云いません」

長い引用になりましたが、重要なところですよ。そして、これが格子縞のトリックです。この奇妙な証言に対して「私」は刑事も裁判所も深く考えない、あることに気づきます。そのあと、作者は少し勿体をつけて、電灯には明智の指紋しかついていなかったことを語り、当の明智には少し興奮した様子でさまざまな探偵小説の蘊蓄を語らせたりします。

そうして、私達はある横町で分れを告げた。其時私は、横町を曲って、彼一流の肩を振る歩き方で、さっさと帰って行く明智の後姿が、その派手な棒縞の浴衣によっての中にくっきりと浮出して見えたのを覚えている。

と話は一段落します。それから十日ほどして、「私」は初めて明智の住まいを訪ねます。「私」が気付いたあることを話すためにです。

僕はあの事件のあった日から、あることを気づいていたのですよ。君は覚えているでしょう。二人の学生が犯人らしい男の着物の色について、まるで違った申立てをしたことをね。一人は黒だといい、一人は白だと云うのです。いくら人間の目が不確かだといって、正反対の黒と白とを間



違えるのは変じゃないですか。警察ではあれをどんな風に解釈したか知りませんが、僕は二人の陳述は両方とも間違でないと思うのですよ。君、分りますか。あれはね、犯人が白と黒とのだんだらの着物を着ていたんですよ。……つまり、太い黒の棒縞の浴衣なんかですね。よく宿屋の貸浴衣にある様な……では何故それが一人に真白に見え、もう一人には真黒に見えたかといいますと、彼等は障子の格子のすき間から見たのですから、丁度その瞬間、一人の目が格子のすき間と着物の白地の部分と一致して見える位置にあり、もう一人の目が黒地の部分と一致して見える位置に合ぐあい緋かすり暗やみにあったんです。これは珍しい偶然かも知れませんが、決して不可能ではないのです。そして、この場合こう考えるより外に方法がないのです。これが格子縞のトリックの種明かしです。

乱歩氏一七一

こうして、「私」は今度の殺人事件の犯人は明智であると論理立てて証明し始めます。学生によって目撃された男の着ていた着物が白であったり黒であったりする件については格子縞のトリックによるもの、電灯のスイッチの指紋は唯一明智のものだけだったこと、安普請の長屋の密室のことについては、蕎麦屋の裏のトイレを借りるように装えば、誰にも見られずに古本屋に出入りでき、蕎麦屋の主人はその時トイレを借りに来た者がいたことを証言している等々述べ立てて、犯人は明智だと証拠立てます。そして、幼馴染が殺されているにもかかわらず、さほどの動揺も見せなかったことも証拠の一つに挙げます。明智はおいつめられました。

君、明智君、僕のいう意味が分るでしょう。動かぬ証拠が君を指さしているのですよ。

...

明智君、僕のいうことが間違っていますか。どうです。もし出来るなら君の弁明を聞こうじゃありませんか。

ところが明智はいきなりゲラゲラと笑い出したのです。これがテレビドラマなら、刑事の謎解きの後、犯人は動機を語って終わるのですが、そうではなかった。明智は、君の推理は余りに外面的で、そして物質的ですよ。

と感想を述べ、これらすべてを論破して見せます。

僕が以前あの女と恋愛関係があったかどうか。又現に彼女と馴染んでいるかどうか。君にはそれ位のことが推察出来なかったのですか。あの晩、なぜ彼女を知っていることを云わなかったか、その訳は簡単ですよ。僕は何も参考になる様な事柄を知らなかったのです。僕は、まだ小学と校へも入らぬ時分に彼女と分れた切りなのですからね。尤も、最近偶然そのことが分って、二三次話し合ったことはありますけれど。

ここにも乱歩氏の計算がありました。本稿では殺された古本屋の細君を、明智は幼馴染の女だけ言っているのです。それが、草稿では、熱海の出身で、旅館の娘といった詳しい照会がなされます。これでは、明智の前言の申し立てが嘘になってしまいます。恐るべし、乱歩！また事件の時、電灯が消えたという目撃証言についても、明智には、電球は切れていたということが分かっておりました。フィラメントなんて、よく自然に切れましたから。しかし、蛍光灯しか知らない世代には、ちょっとピンと来ないだろうと思われます。

そして、肝心の格子縞のトリックです。これに対しては、明智は錯覚ということを持ち出し、「人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよりないものですよ。」と、本に書かれた様々な事例を持ち出します。くわえて、

格子のすき間から、棒縞の浴衣を思付いた君の着眼は、却々面白いには面白いですが、あまりおおきすぎるじゃありませんか。

と言っのけす。そして最後に、

どうも、あの旭屋の外に犯人の通路はないと思ったのですよ。で僕もあすこへ行って調べて見ましたが、その結果は、残念ながら、君と正反対の結論に達したのです。実際は便所を借りた男なんてなかったのですよ。

と言い、全てを覆して見せます。しかし、なぜ殺人事件は起こったのか。あけちは思いもかけぬことを言いだします。

実は、古本屋の女房の体は、いつもあざだらけでした。

古本屋の細君の身体中にある生傷のあったことです。それから間もなく、僕は蕎麦屋の細君の身体にも同じ様な生傷があることを聞込みました。

こう切り出します。

旭屋の主人というのは、サードの流れをくんだ、ひどい惨虐色情者で、何という運命のいたずらでしょう、一軒置いて隣に、女のマゾツホを発見したのです。古本屋の細君は彼に劣らぬ被虐色情者だったのです。

うわべは極めて何気なさ相な、この人世の裏面に、どんなに意外な、陰惨な秘密が隠されているかということ、まざまざと見せつけられた様な気がします。

こうして、この殺人事件は解明されました。そして、最後に、蕎麦屋の主人が自首してきたことを報道する新聞記事を明智が「私」に示すところで、このミステリーは終わります。思いもよらないトリック、密室殺人、謎解き、これらのそろったミステリーでありました。そして、惨虐色情者、被虐色情者を持ち出して原色の色付けをして見せます。これが乱歩氏の世界でありました。

## 乱歩氏—8—

乱歩氏の初期作品には、グロテスクな作品が多くあります。しかし、華麗な作品もあるので。黒蜥蜴とパノラマ島奇談がそれだと、私は思っています。黒蜥蜴はかの三島由紀夫も大変な愛読者で、自らもこれを劇化し、脚本も書いているはずですが。しかし、この作品がまた一九三四年に書かれたものというのは、なんだか時代を飛び越えているような気がして、逆に新鮮な驚きがあります。とは言うものの、どこか怪人二十面相の焼き直しのように、まるで派生種のようにみえます。しかし、年代順から見て黒蜥蜴は一九三四年、怪人二十面相は一九三六年でありましたから、一度っきりの黒蜥蜴の影が薄くてそんな風に見えるのでしょう。逆に言えば、二十面相の下地がここにあったようだとみえます。大体、乱歩氏は、

明智探偵は、一ぺんきりでよすつもりだったが、誰彼に「いい主人公を作り上げましたね」といわれるものだから、つい引き続いて小五郎ものを書くようになった。だが彼も安っぽくなったものである。

と、探偵小説四十年の中で述べています。そのころ乱歩氏はスランプに見舞われ、行き詰まっていた。

どういう風の吹き回しか、私は少年ものを書いてみる気になった。私の書くものは筋も子供っぽい文章もやさしいものがおおかったから、編集者が、子供ものに向くだろうと狙いをつけたのかもしれない。筋はルパンの焼き直しみたいなもので、大人ものを書くよりよほど楽であった

。

ところが、少年雑誌に從來そういうものがなかったと見えて、大いに受けた。(同上)

怪人二十面相=一九三六年、少年探偵団=一九三七年、妖怪博=一九三八年

ということです。この時期が乱歩氏、人気の絶頂でありました。私はまだ生まれていません！ところが、その乱歩氏の足を引っ張るような出来事が、この時期起こります。その原因は一九二九年、昭和四年に書いた悪夢、(芋虫)から端を発します。芋虫自体はごく短編で、読もうと思うとほんの三〇分ほどで読破できます。そして、この作品もつい最近の二〇〇五年と二〇一〇年に映画化されています。

#### 乱歩氏—9—

乱歩氏の一九二九年に書いた芋虫を、単行本として発行することになった時、当局からまったがかかりました。乱歩氏自身は、これを反戦小説と思って書いたわけではなかったのですが、内容として金鶏勲章や、反戦的内容と読める表現が多々あり、出版社も雑誌掲載の折には、伏字だらけにしたのでした。しかしそれでも当局はこれを全面削除するように命じてきました。

「左翼より賞賛されしものが右翼に嫌われるのは至極当然の事であり私は何とも思わなかった。」「夢を語る私の性格は現実世界からどのような扱いを受けても一向に痛痒を感じないのである」

乱歩氏自身はこう語っておりますが、以来、時局は切迫してきてミステリー小説なども次第に衰退してゆくこととなります。当の乱歩氏も、この時から約一〇年、探偵小説については休筆してしまいます。

戦後、乱歩氏は一九四九年（昭和24年）1月号より「青銅の魔人」（雑誌「少年」に連載）で少年ものを再開します。他にも大人向けの作品も書いてはありましたが、明智小五郎と二十面相、少年探偵団の作品を書き続けておりました。我々世代は、このころのことを記憶していて、少年探偵団を自分のことのように思いこんできたのではないかと思います。

今でこそ、乱歩作品は話題にもなりませんが、まだ存命中に全集が四回も刊行された作家は乱歩氏以外にありません。一度なぞ、傾きかけた平凡社が、乱歩全種を発行し、24万部も売れたことで立て直すことができたのでした。また、乱歩氏は名前に大を冠して、内外で大乱歩ともよばれたそうです。それほどであっても、今はどうでしょうか。乱歩の名前は生きているのでしょうか。乱歩の作品は読まれているのでしょうか。乱歩氏の名前をしっかりと記憶にとどめているのは、我々世代までかもしれません。